電車内は人の心の中

小田　浩正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
電車内は人の心の中

【Ｎコード】
Ｎ８８２４Ｚ

【作者名】
小田　浩正

【あらすじ】
僕は下校での電車内では、立たずに必ず座るようにしている。
そして、目を閉じて音楽プレイヤーでクラシックを聴く。
だが、目を開けたら……

だらだら続けるつもりです。コメディーだったり、ファンタジーになってしまう作品です。毎回１０００文字程度を目安として書いているので、気楽にどうぞ？

最初に（前書き）

最初にご説明から

最初に

僕にはある秘密を持っている。

というよりは、ある秘密を知っていると言った方が妥当だろう。

僕はある時間のある列車のある席に座る。

そして、僕の向かい側の席に誰かしら座らなければ、秘密の効果は見せることが出来ない。

まぁ、見せれるかは別だが……。

どうしてこうなってしまったのか知らない。

それは、ある日突然起きた。

その起きたことを最初、どう対処していいのか、わからなかった。

しかし、今ではこんなことが起きても対処は楽々なのです。

『こんなこと』を今は説明できない。

それを説明をしても、理解できないだろうと思うから。

だから、1回僕は過去の起きたことから説明していこうと思う。

過去と言っても、1週間ぐらい前にしか戻らないが。

では、始めましょう。

どうぞ、『電車内』へ……。

最初に（後書き）

これから始まります。

よろしくお願いします。

第1話　プロローグ（前書き）

初めて書きました。
出来はわかりません。

見た方はなるべくご感想よろしくお願いします。

第1話　プロローグ

僕は電車内にいた。

なぜなら下校中だからだ。

僕の通っている学校では、〇〇線の始発駅が1番の最寄駅となるため、学校が終わって電車内に入れば、席が空いていることが多い。

だから僕はドアの近くの席に座った。

さて、僕はこれから電車内で約２０分間過ごさなければならない。

することがない。

本を読めばいいのではないかと思うかもしれないが、文庫のあの厚さを見てしまうと気が引けてしまう。

小学生のころは、教科書に書かれた詩を見るだけで、吐き気がした。

マンガでもいいのではないかと思うかもしれないが、僕はマンガを読まない主義。

だから、無理。いや、別に読もうと思えば読める。

だが読まない。

しかし、そんな僕でも高校生になれば、中学生の『矛盾』ぐらいは読めてしまう。

…そんな自慢話は置いとこう。

しょうがないので、僕はポケットからたった一人のアーティストしか入っていない音楽プレイヤーを取りだし、耳をイヤホンに装着。

曲はベートーベンで「悲愴」

何と言っても、今の僕に合ってしまう曲である。

…自分でもそう思ってしまうのはなんだが、そうなのだ。

演奏時間は約２０分なのでちょうどいい配分だ。

目を閉じる。さて、　鑑賞にでも浸ろう。

「…ふっ…ふっ…ふっ…」

「…？…」

なぜか、バスドラムをたたく音とともに変な音が聞こえる。

「……」

「……」

聞き間違いだったようだ。

目を開けて、周りを確認。

まばらに人はいるが、特に気になることは見つからなかった。

もう1度目を閉じて、曲の鑑賞に浸ろう。

さて、もうそろそろ1つ目の駅にたどり着くだろう。

始発駅から自分の家の最寄駅の間に駅が2つあるが、いつも乗り込んでくる人は少ない。

なくてもいいのではないかと思うのだが、朝は案外乗り込んで来て登校中、押しつぶされる。

ということは、必要なのである…。朝限定。

そして、僕はいつも暇なので僕が乗っている列車で、誰がどこのドアから入ってくるのか、統計をしている。

僕はなるべくいつも同じ時間の列車に乗ろうとしている。

大抵、この時間に乗り込んでくるのは買い物帰りのおばさんだけだ。

腰が曲がり、持ち歩いているのおばあちゃんが大変そうに見えて、手伝おうか迷うこともあるが、なるべく気にしないようにしている。

『次は○○〜。○○駅で〜す』

かすかに耳に入った、アナウンスで僕は行動に移る。

さて、かばんの中からノートを取り出す。目を開けないで。

表紙には、『ＤＡＴＡ　ＮＯＴＥ』と書かれている。
決して『ＤＥＡＴＨ　ＮＯＴＥ』ではない。
そこは強調しときたい。
まぁ黒いけど…。
さて、最後の方からページをめくる。
もうそろそろ、ノートも終わりそうだ。
結構書いた方だ。なかなか僕もやったものだ。楽しいものではないのに。
そして、電車が減速し、停まった。
ドアが開く音がしたので、目を開ける。
「……？」
前を向いたら、そこはまるで別の世界だった。
…なんてことはない。
前を向いたら、そこにいたのは女だった。
別に女が前にいてもおかしくはない。
女の行動を見て僕は、口を開けざる負えなかった。

「…ふっ…ふっ…ふっ…」

なぜなら、女は……

僕の前で筋トレをしていたから。

さて、どうしようか？

第1話　プロローグ（後書き）

暇があれば、続きを書いていきます。

初めて書いたので、出来はわかりません。

見た方はなるべくご感想よろしくお願いします。

第1話　第1章　さて、どうするか？（前書き）

だらだら書いていきます。

ご感想よろしくお願いします。

第1話　第1章　さて、どうするか？

さて、どうしようか？

僕の目の前では、女が筋トレをしている。

まず、状況を説明しよう。

駅に着いた時、僕は目を開けて前にいる女に気付く。

女は自分の通っている高校の制服を着ている。

僕は、高校1年生のため、同級生もしくは上級生となるだろう。

顔はまぁずば抜けてではないが、綺麗な人の分類に入るであろうことが予測できる。

あごはシャープ。ほんのり赤い唇。黒の長髪。目はパッチリ。長いまつ毛。高い鼻。

そんな女がなぜ僕の前で、筋トレしているんだろうか？

聞いてみていいのか？　はたまた、無視した方がいいのか？

周りを見回す。

乗り込む人は今日は誰もいないまま走り出す。

横には、僕と同類のような学生がいる。

斜め前には、疲れきっているのかサラリーマンが先ほどから寝ている。

遠くの方を眺めると女子高生2人組が、何か喋っている。

ドアあたりで、塾に通うためなのか大きいバッグを持って、立っている。

そして、前にいる女子。

注目すべきは、この人物。

今までにいない希少価値のある人物だ。

僕は筋トレをあまりしたことがないため、名前など知らない。

だから、彼女の行っていることが言葉でしか説明できない。

彼女は、屈伸のような動作を一定のリズムで行っている。

準備体操のような足を伸ばしているときに、体を前に向けるのではなく、地面と垂直になるように体が動いていない。

手は、頭の後ろで組んでいる。

足の方は見えそうで見えない。なんか、悔しい。

ハッ！

もしかして……。

そこで僕は気付く。

僕はなんて愚かなことをしてしまったんだ。

なぜなら、僕が彼女を見ていたということは、彼女も僕を見ることができる。

僕の行動を見ていてもおかしくはない。

まず僕は、顔をガン見していた。

そのころ僕は、そこそこきれいな人だなぁとか完全に上の空になってしまっていた。

何と言う失態。

僕は自分の顔がみるみる赤くなっていくのを感じた。

相手が気付いているのか、一応確認のために彼女の方を向く。

いまだに彼女は筋トレ中。

気付いているのだろうか？

何一つ気にしていないそぶりで続けている。

これなら安心かと思った。

だが、顔の表情がどうなっているか分からない。

怒っているのかもしれない。

睨んでいるのかもしれない。

女王様的な微笑みをしているかもしれない。

顔を確認したいのだが、なかなか見ることができない。

彼女がしゃがんでいるときは、ちょうど目線が同じぐらいになるために見られない。

そして、立っているときは、上から罵るかのような態度をみせているのかもしれない。

そんな顔されているにもかかわらず顔見てしまったら、どう受け捉えられるかわかったもんじゃない。

どうすればいいんだろうか？

第1話　第2章　白い三角との出会い（前書き）

ゆっくりしていってください。

ご感想待ってます。

第1話　第2章　白い三角との出会い

どうすればいいんだ？

僕は彼女の方を向けない。

だったら、僕は目を下に向ける。

まだ膝元に開いていたノートに書かれた数字を見る。

自分でもこの膨大な数字を見ると、吐き気がしてくる。

だが、この程度では時間は進んでくれない。

うん？

そういえば、今も彼女がこちらを見ていたら、僕の行動を見られていることになる。

ということは、全部筒抜けとなっていることだ。

今までの行動が全て見られてたとしたら？

なんか、全てをさらけ出しているかのようで恥ずかしい。

こうなったら、我慢でしかない。

目を閉じる。

イヤホンからは、『悲壮』の終盤に突入していた。
だから僕は、外など気にせずに耳に傾けた。
……
『次は××〜。××駅で〜す。』
２つ目の駅の名がアナウンスにながれた。
僕は祈っていた。
彼女がこの駅で降りてくれることに。

まぁ無理だったが。
細く目を開けて確認したが、まだ僕の目の前にはいた。
「ふぅ…」
しかし彼女は、筋トレをやめていた。
軽く息を整えている。
タオルで汗をぬぐう作業もしていた。
夏も過ぎて、秋になりかけているためだいぶ涼しくはなった。

だが、結構な量の筋トレをしていれば、汗は書いて当然だ。

しかし、なぜ制服でやっていたのだろうか？

ここで、好奇が訪れる。

彼女は、僕の目の前から移動した。

これで僕は救われると思った。

だが、彼女は向かい側に移動した。

そして今度は、つり革を使って、懸垂と言ったか（？）そんなことをし始めた。

上下に腕で体を持ち上げる。

足がついてしまうためなのか、曲げてやっている。

そこで僕は見てはいけない物を目にする。

彼女は気付いていないのか、スカートがめくれてきている。

だが、悔しいが、見えない。

ハッ！

僕は気付く。

また誘っているのか？

僕が痴漢的な行動をしていることを確認するために。

証拠が欲しいために。

しかし、そんな手にはのらないぞ。

僕はそこで、目を閉じた。

次の駅は僕の最寄駅だ。

だから僕は脱出経路を考える。

こんな呪縛から解放されるために。

ドアに近い席に座っているために、他の誰よりも早くこの列車から出られる。

目を閉じてでも走り込めるのではないかと思う。

『次は△△〜。△△駅で〜す』

アナウンスもながれた。

だから、僕はバッグにノートをしまう。

手にバッグを抱きしめて、準備万端となる。

そして、揺れがおさまる。

ということは、電車が駅にたどり着いたことを意味する。

ドアの開く音がする。

いざ、参る！

だが、先ほどの2つの駅では乗り込んでくる人の数は少なかったが、この駅はある程度大きい市にある。

だから、早い時間でも乗り込んでくる人はいる。

そこに気付けなかった僕は、やってしまう。

ドアが開いて、僕は向かったが激突してしまった。

相手は買い物袋を持ったおばさん。

そして、おばさんは強かった。

僕はずっしりとしたおばさんに跳ね返させられて、電車内に戻される。

僕は倒れこんでしまった。

そこで僕は見る。

見てしまった。

白い三角の物を。

第1話　第2章　白い三角との出会い（後書き）

ご感想よろしくお願いします。

第1話　第3章　うん、困った（前書き）

長く見守ってください。

ご感想よろしくお願いします。

第1話　第3章　うん、困った

見てしまった。

白い三角の物を。

「大丈夫？」

上から声が聞こえた。

それはそうだ。

僕は今、倒れているから。

「ほら、手をとって」

手がこちらに伸びてくる。

僕は手をとって立った。

そして顔を見ると僕は慌てた。

さっきの筋トレ女子だったからだ。

「さっきのことだけど…」

さっきってまさか、僕があなたのことをじっと見ていたことか？

謝らなければいけない

「スミマセンでした！」

「はい？」

僕に満面な笑顔で返答。

ま、まさか、謝りが足りないということか？

僕は土下座をして、

「ホント、スミマセンでした！！」

「はい？」

ま、まだか？　まだ足りないということか？

「ほんとーうにっ！　スミマセンでしたっ！！」

「えっと…何がですか？」

まだ、知らないふりをするんですか？

も、もう知らない！

「あなたの筋トレをじっと見ていたことです…」

これで僕はもう…

「ど、どういうことですか？」

うん？

「…あなたが僕の前で筋トレしていたことですが…」

まだ知らないふりをするんだろうか？

「あ、あのう…は、恥ずかしいので、一回降りましょう…」

なぜか、顔を赤くしながら先に電車を降りてしまう。

僕はドアが閉まる中、なんとかして足を出して閉まるのを防ぐ。

これがなかなか痛い。

さて、彼女は近くにあったベンチに座って、手招きをする。

まだ、顔が赤い。

僕はそこに座っていいのだろうか？

「は、早く…座ってください…」

声がだんだん小さくなっていく。

僕はしぶしぶ、彼女の横に座る。

「…どこから話した方がいいのでしょうか？
　だいぶ話がかみ合っていないようですが？」

僕は先ほどから聞きたかったことを口にすることにした。

「…聞くのもなんですが、どうして筋トレなどを…」

「そこからかみ合っていませんね…」

どういうことだ？

「人を間違えていないでしょうか？」

「いえ、あなただったと思いますが…」

本当にかみ合っていないようだ。

「僕はあなたが懸垂しているところを…」

「ど、どうして…どうしてですか！」

「な、何がですか？」

彼女が言いたいことはどういうことだ？

僕が幻想を見ていたことか？

彼女を不快にしてしまったのかもしれない。

顔を下に向けて、手を膝にあて、プルプルし始めた。

相当怒っているかもしれない。

どうやって謝ろうか。

僕の知っている謝り方で、土下座が1番かと思ったが、他に何かあるのだろうか？

空中で1回転して土下座をし、頭を下げる回数を素早く多くやるのはどうだろうか？

ネタになるだけか…。

そして、そんなことを考えていると彼女がこちらを見て言った。

「なんで、私が考えてたことが見えているんですか！！」

「……はぁ？」

僕は彼女の方を向いて驚きを口にしてしまった。

「なんでっ！　私がしてみたいことをっ！　あなたが見えているんですかっ！」

うん、困ったね。

第1話　第3章　うん、困った（後書き）

ご感想よろしくお願いします。

第1話　第4章　吹っ飛び方（前書き）

どんどん書いていきます。

ご感想よろしくお願いします。

第1話　第4章　吹っ飛び方

「なんでっ！　私がしてみたいことをっ！　あなたが見えているんですかっ！」

うん、困ったね。

そんなこと言われても知るか！

「えっと……どういうことですか？」

なるべく、平静さを保ったと思う。

彼女は今にでも、爆発しそうなぐらいに真っ赤っかとなってしまっている。

応答が出来ない状態じゃないだろうか？

「……大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫じゃないです……」

それはそうだ。

「なにか、冷たいものでも持ってきましょうか？」

「要りません……」

ならいいけど……けど。

僕は、それでも自販機でペットボトルでも買うことにした。
どう見ても、湯気が出ている。
どっから見ても、大丈夫じゃない。
「お茶です」
「えっ。いらないって言ったんですが」
「どう見ても大丈夫じゃなさそうでしたから」
まぁ、原因は僕にあるだろうけど。
「……一応、もらっときます」
ふたを開けて、口元に運ぶ。
ひとつ、ひとつの動作が美しい。
すっかり見とれてしまうほどに。
「……あのう、さっきからじっと私を見ているのでしょうか？」
「……いえ、別に見てなどは」
「もう、別にいいです。なんか吹っ切れましたから」
吹っ切れたと言った。

ということは、僕を地獄に引きずるようなことでも思いついたんじゃないだろうか。

「さっきの話ですが、まとめた方がいいのではないかと思うんですが」

テキパキとやるタイプの女子らしい。

クラス委員長的な存在なのかもしれない。

「僕もそう思うのですが、どこからまとめればいいのかわからないんですが」

「私もそう思います」

一区切りつけて

「ですが、このことの発端はあなたからの誤解によって引き起こされたものだと思うのですが違いますか」

「どこに誤解があったのでしょうか？」

いろいろな所に、誤解を生んでても仕方ない会話をしていたと思う。

今思えば、彼女は僕の謝りを不思議な目で見ていたことに気付く。

「どこと言えば、最初からですね。私は見ていたのです。あなたがドアに向かって盗人（ぬすっと）のごとく走り込むところを」

盗人と言われてしまった。

まぁ、そんな感じで走っていたのは覚えているが、盗人と言われなくてもいいのでは？

「走って、僕は乗り込もうとしていたおばさんに激突したところをですか？」

「私は最初に『さっきのこと』と言った覚えがあります」

「僕も覚えていますが……」

「たぶんそこが私たちの話がかみ合わなくなってしまったところだと思います」

まぁ僕は電車内での彼女が奇怪な行動をしていたことだと、勘違いしたということだろう。

「私はあの時の言葉の意味は、『そんなに弾き飛ばされるなんて、すごいですね』と言いたかったのです」

何でそんなことを言おうとしていたんですか……。

「……それを言われたら、今度は違う意味で話が盛り上がってしまったでしょう」

「たぶんそうでしょうね。私もなぜそんな言葉を言おうとしたのかわからないですけど、とにかく凄かったからでしょうね」

そんな吹っ飛び方をしていたのか、僕は……。

第1話　第4章　吹っ飛び方（後書き）

ご感想よろしくお願いします。

あと、間違いなどあったら、よろしくお願いします。

第1話　第5章　彼女は……（前書き）

まだまだ頑張ります。

ご感想よろしくお願いします。

第1話　第5章　彼女は……

いったいどんな吹っ飛び方をしていたんだ？

まぁそんなことよりも。

「私がなぜ、筋トレしているところを見えているのかですが……」

彼女もそこが疑問らしい。

彼女は僕の目の前でやった覚えがないらしい。

「あなたは僕の目の前で、えっと……こんな感じのことを」

僕はベンチから立って、彼女のしていたことを真似する。

名前がわからないから僕は、実践して見せる。

「ちょ、ちょっとやめて。こんなところでそんなことをしてたら目立つでしょ？」

「……いや、名前がわからないからやって見せたのに」

まぁこんなところでやるものじゃない。

ついでに電車内でも。

「それはスクワットっていうんです。ってなんで続けているんですか！」

「いやぁ、なんか意外とこれ、おもしろいなぁって」
「は、早く……やめて欲しいんだけど」
あまり体力のない僕でも、なんか遊び感覚でやるとおもしろい。
「それでなんですが、なぜ……私が」
「してみたいことを見えているかってことですよね？」
彼女はまた、顔が赤くなる。
「あまり……大きな声で……言わないでください……」
「わかりましたから、怒らないでください」
きれいな顔がこうなるとかわいいんだな。
「なに笑っているんですか！」
「まぁまぁ」
ちょっと怒らせてしまったらしい。
「それでですが、早く解決しましょうよ」
「……はい」
彼女もおとなしくなったので、僕も彼女もベンチに座る。

「聞いていいのかわからないんですが、『してみたいこと』って？」

彼女はまたも、赤くなっていく。

しかし彼女はなんとか抑え込むように、背を丸めて、歯を食いしばってる。

「言いたくなければ、このことはなしにしてもいいのですが……」

彼女がいやならば、強要などしなくてもいい。

「いや、私、このことについて気になっているんです」

「何をですか？」

「なぜ見えているのか。あなたが私の考えていたことを」

「さっきから『考えていた』とか、『してみたいこと』ってなんなんですか？」

それを言ってもらわないとなんにも始まらない。

「それはですね……」

声が小さくなっていく。

「わ…」

「はい？」

「わ…」

「わ？」

「私、筋トレが大好きなんです！！」

彼女は筋肉ウーマンだったらしい。

「まぁそれはそうでしょうね」

僕は電車内でいやというほど見せつけられた。

「バカにしているんですかっ！」

「いえいえ」

だが、筋トレが好きならあの時のはあなたがやったんじゃないか？

例えば、知らないうちに催眠術にかかっていたとか？

それとも、彼女がとにかくやりたくて仕方なかったのを覚えてないとか？

「今、何か変なことを考えてますよね？」

「そんなことめっそうもない」

「怪しいですが……」

「それでですが、あなたが筋トレマニアだとわかりましたが」

「無理やり話をそらしたね……」

「あなたはそこまで人に筋トレを見せつけたかったのですか？」

「そんなことはないっ！」

それもそうか。

第1話　第5章　彼女は……（後書き）

ご感想よろしくお願いします。

第1話　第6章　手の平を僕の頬に（前書き）

だいぶタイトルが凄いことになってきました。

すみませんが、ご感想よろしくお願いします。

第1話　第6章　手の平を僕の頬に

それもそうか。

「じゃあ、なんでなんですか？」

「知るかっ！」

「まぁ、怒らないでください」

「そんなこと言われたくないっ！」

話が進まない。

「じゃあ、戻りますが……なんで電車内であんなことを？」

「女性にそこまで迫る男は嫌われますよ？」

そんなことをいきなり言われると、心にずっしり刺さる。

しかし僕はそんなことを気にしない。

気にしないぞ。

僕は平静を保って、

「……僕は」

「だいぶ、心に刺さったようですね。してやったりぃ～」

結構、軽い女なのか？

「べ、別に……気にしてないよっ！」

「あらあら、案外かわいいんですね」

女から、かわいいとか言われるのは、これまた心に刺さる。

「……で、早く答えてください」

「まぁまぁ、焦らないでください」

話の主導権を持って行かれたような気がする。

これは困ることだよな。

「これから話すことは、他の周りの人に言わないで欲しいんですけど。約束できますか？」

周りの人？

「周りの人とはどういうことですか？」

「えっ？」

何で疑問形？

その反応は1番困る。

どうしたらいいんだ？

「だから、周りの人とは誰ですか？」

「ですから、‘クラスメイト’です！」

クラスメイト？

「あのう、僕はあなたがどのクラスの方なのか知らないのですが……」

「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」

なんだその驚きは……。

彼女の方が目立つんじゃないか？

「その叫びはいったい？」

「あなたっ！　半年間どう過ごしてきたのですかっ！」

「どうと言われても……」

なぜなら、知らないからだ。

知る由もないから。

「で、では……あなた。私の名前は知らないのですか？」

「知るわけがないじゃないですか」

「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」

またその驚きですか……。

いい加減あきるんですが。

「それで……どういうことですか？」

全く理解できない。

知らないことを言えと言われても、困ってしまう。

知らないんだから、しょうがないではないか。

僕の頭には、カスカスな脳しかないんだから、覚えていることなど少ない。

どっかで相手が見ていたとしても、僕は気付いていないことも多々あるかもしれないではないか。

さて、どうしようか。

そんなに叫ばれても、僕は対応しようとしても、出来ることはない。

まぁ、一応考えてみよう。

冷静になってみよう。

今の状況だと僕は、圧倒的不利に立たされている。

彼女は知っているようだ。
僕は知らないが。
ということは、僕は結構危ない状況に立たされているかもしれない。
しかし、知らないのだから、聞くしか方法がない。
何をされてもおかしくはないだろう。
怒って、殴りかかってくるかもしれない。
筋トレをしているから、重たいのを放ってくるかもしれない。
覚悟しなければ。
……ふぅ。
よし、なんでもこいやっ！
「なぜ、顔にそこまで力を入れているのですか？」
「気にしないで欲しい」
「で、どうなんですか？」
「知らないから教えてグホッ！」
平手打ちが左から来た。

やっぱ、痛かった。

一応倒れ伏すことはなかったが、後ろに後退してしまった。

「なんで知らないんですかっ！　心治(しんじ)さんっ！」

なんで僕の名前を知っているんだ？

「私はっ！　あなたと同じクラスっ！　園原文華(そのはらふみか)ですっ！」

「……ごめん。覚えがない」

「なんですってっ！」

彼女がこちらに向かってきた。

そして……。

平手打ちが右からも来た。

第1話　第6章　手の平を僕の頬に（後書き）

読みづらいかな？

読みやすければ、このまま続けていきたいと思います。

ご感想よろしくお願いします。

第1話　第7話　どう見ても彼女は……（前書き）

だいぶ書くのが遅くなっています。

なぜなら、宿題に手をつけなければならないからです。

嘘です。

学校から借りた、『境界線上のホラ子』の４下を読まなくてはならないのです。

あの分厚さ。ラノベでは考えられない１０００ページ。

学生である僕には手を出せない本なので、学校に無理やり頼んでしまいました。

こういう話もしていきたいと思います。

ご感想よろしくお願いします。

第1話　第7話　どう見ても彼女は……

平手打ちのせいで僕は、ア〇パ〇マ〇のような顔になっているだろう。

相当腫れていると思う。

僕は彼女をこれ以上怒らせることをしてはいけないと思った。

なぜなら、彼女の顔は鬼同然で、口から火を吹いてもおかしくはない状態だったから。

「夏休みを間に挟んでいますが、もうほとんど半年を過ごしたも同然ですのにっ！」

いや、それは僕も同然だ。

半年過ごして、クラスの人の名前があいまいしか覚えてないことはあるかもしれない。

しかし、顔すら覚えてないなど僕も驚きだ。

「なんでだろうね？　僕も驚いたよ」

「何でそこまで平然としてられるんですかっ！」

あれれ？

もっと怒らせてしまったらしい。

「まぁまぁ、深呼吸をしまグホッ？」

今度は、腹に入った。

彼女のストレートを僕は避けることが出来なかった。

見ることはできた。

だが、対応することはできなかった。

鍛えてない体では、彼女のパンチには敵わなかった。

僕は片足をついて、彼女の方を向く。

「あなた、人を侮辱するのがうまいようですね」

「……あ、ありがとう……ございます」

「礼だけは言えるのですね。そこは関心しますね」

感心されても僕は困るんだけど。

「殴ったおかげで、少し落ち着きました」

殴るだけで、落ち着くならもっと殴って欲しいね。

いや、僕はマゾではない。

僕にじゃない。

他の物にだよ。
話して落ち着かせるよりは楽だからね。
「それでですが、始めますよ」
「……早くしてください」
だいぶ痛みがひいたので、ベンチに戻る。
彼女も横に座る。
「じゃあ始めますね。まぁまずは、私の過去から話したいと思います。
私は昔、他の人と比べて、背が小さく太ってました。」
小さい頃、太っていた人は僕の周りにもいる。
たぶん彼女もその一人だろう。
「昔と言っても、中学生ぐらいです」
「……？」
今、なんと？
「まぁ驚くのも無理ないですよね」

となると、相当頑張ってダイエットしたこととなる。
どれほどやったのだろうか？
「その頃の写真がこれです」
横を向くと彼女はバッグからケータイをとって、操作していた。
そして、こちらに向ける。
「これを他の人に見せることで、改めて太らないことを誓うんです」
僕はどう反応していいのかわからなかった。
「これを見せても、もう恥ずかしくはなりません」
口から何か言葉を出そうとしても、思いつかない。
「そこまで驚かなくてもいいんですよ」
たぶん、彼女は僕の驚いている理由をわかっていない。
なぜなら……
「あのう……」
「はい、何でしょうか？」
「全く太ってないじゃんっ！！」

第1話　第7話　どう見ても彼女は……（後書き）

ご感想よろしくお願いします。

感想をくださった方々ありがとうございました。

暇な時間を使って、これからも書いていきたいと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8824z/

電車内は人の心の中

2011年12月30日23時49分発行